

温故知新

～次の時代を次の世代に託すために～

はじめに

学校法人志學館学園第4代理事長、故志賀達一先生は、生前ある講演に際し、当時大きな話題となっていた遺伝子操作やクローン技術等、バイオテクノロジーに関わる事例に触れ、次のようなことを述べられました。

「今まで科学技術に対して保ってきた理性的、倫理的優位性と、精神的なコントロールを更に強め、人間の驕りを捨てなければ、地球上の生物が消滅する危険性を孕んでいるのです。このような凄まじい内容を孕む二十一世紀を生きていく若い人達には、発達した科学技術の成果を認めつつもそれに溺れず、それを批判する精神的文化を包括していく姿勢として、人間が人間や他の生物のどこまで手を加えることが許されるのかという判断が求められるでしょう。すると若い人達は、人間の幸福にとって確固たる不偏の価値とは何かを見つめ、地球上の全生物に対する責任を背負って判断をしなければなりません。その判断の結果に、二十一世紀に生きる地球上の生物の生命と幸福がかかっています。このような時代こそ人間教育を重視する私学教育が真価を発揮し、将来を担うたくましい若者を育てなければなりません。」

この講演が行われて十余年経った今、科学技術はなお進歩し続け、膨大かつ複雑な情報が社会に溢れています。今やひとつの専門分野を研究するにしても、各分野を越えた、学際的な視野や思考が必要とされてくる時代です。この多様化、複雑化している現代社会を生き抜き、そして牽引していく人材となるためには、単に広く知識を持ち、深く専門の学芸を身につけるだけでなく、学び得た知識や学芸を活かし、また制御できるだけの人格形成が必要となります。

学校法人志學館学園は、明治40年に「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」を建学の精神とし、「人格の完成を目指す教育」を教育理念として、百余年の歴史を刻んでいます。いくつもの苦難の時期を乗り越えてこられたのも、先人たちが地域社会に受け入れられ、また貢献できる学校とは何かを真剣に考え、教育と学校運営に尽力されてきたからこそと考えます。我々は、感謝と敬意の心をもって、この輝かしい歴史と伝統を改めて見詰め直し、今何が必要であるかを見極め、未来を担う子どもたちへ伝えていかななくてはなりません。次の時代を次の世代に託すために、温故知新の精神をもって、建学の精神を具現化してまいります。

今の時代だからこそ必要とされる人間像

現在、2010年度より開始された第二次経営計画においては、「よりよき社会の創造を担う人材の育成」をビジョンとし、それぞれの学校で具体的な経営計画を策定し、推進しているところです。計画策定時の学園を取り巻く教育環境については、学生・生徒の資質問題、教育の質保証、学校の社会的責任、道徳教育・社会性教育の重視という4つの項目が、今後その変化を注視すべき事項として記載されています。学生・生徒の資質向上、それを実現するための教員の資質向上、教育だけでなく社会貢献の実現、さらには道徳心や社会性といった、地域社会における人間のあるべき姿の発信は、私立学校の大きな使命でもあります。現代の日本においては、地域コミュニティの崩壊が指摘され、核家族ですらなく独り暮らし世帯も増えている中、新たなコミュニティのあり方が確立されないまま、その風潮を助長するような社会になっているように感じます。良くも悪くも人と触れ合うことなしに生活が成り立ってしまうだけのサービスが提供される時代です。その結果人間関係が希薄化し、子どもはもちろん、かつては腹を割って話し、夢を語り合った大人たちさえもコミュニケーション能力が欠如していつているのではないのでしょうか。一方で、東日本大震災で見られたように、日本人の根底には、利他の精神、思いやりの心が確かに存在し、これらは世界に誇れる精神性であります。この精神性は、教育課程には直接顕れない形であっても、全国の学校で伝えられてきたはずのものなのです。

本学園においても、学園の創設者満田ユイ先生は、「雪のごとく清らかに 月のごとく明らけく 花のごとく撫子の 強く優しく」という言葉を遺され、本学園の教育理念を具体的に実践する時の心構えとして親しみやすく理解できる「みおしえ」として伝えられてきました。この「みおしえ」は、女性的な文体表現にかかわらず「清く、明るく、強く、優しく」というその内容が人間としての在り方、人の美しい生き方を表すものとして、男女共学になった今なお、脈々と学園に継承されています。「みおしえ」は、どのように時代が変わり、また制度や課程が変わろうとも、目指すべき人間像のひとつと考えます。今や少子化の歯止めはきかず、昔のようなコミュニティを創造できる可能性は極めて低いと考えられます。こんな時代だからこそ、新たなコミュニティ、新たな絆のあり方の形を私学の一員として示す必要があり、その際には今一度、この「みおしえ」を見つめなおし、現代社会において必要な人間像として発信していくべきではないのでしょうか。具体的な手法として教育の中で伝えていくだけではなく、教職員一人ひとりがこの「みおしえ」を具現化できるような人間性を持ち、学生・生徒・園児をはじめとするステークホルダーに対し、規範となれるような人材となっていきたいと思えます。

地域に貢献できる高等教育機関となるために

全国では大学・短大の進学率が60%を超える中、鹿児島はまだ進学率が低い状況です。だからこそ、地方の高等教育機関としての役割が重要になってくると考えます。これからはより一層、地域に必要とされる大学・短期大学とは何かを見極め、それぞれのカリキュラムを構成していかななくてはならないと思います。

志學館大学は、男女共学化し、現在の名称となって15年が経とうとしています。この間、法学部の開設、文学部から人間関係学部への名称変更、大学院の設置や改組を行い、地域のニーズに応じてまいりました。教職員と学生の距離が近い大学として、今後もより一層ソフト・ハード面ともに学生の声を集め、それに応えられる環境を整えるとともに、今後は学生を含めたステークホルダーに対しても教職員からのメッセージが伝わるような体制を整えていかななくてはなりません。

鹿児島女子短期大学は、2015年には創立50周年を迎えます。児童教育、生活科学、教養の3学科は、課程こそ少しずつ変えながらも、その原型は変わることなく歴史を刻んでいます。次の世代を育てられる人材、人々の生活を守る人材、広い知識と教養をもつ人材は、いずれも地域社会にとって必要不可欠です。今後も資格や制度のあり方はめまぐるしく変わると予想されますが、地域に必要とされる人材の本質を見失わないようにしながら、時代の流れに対応していかななくてはなりません。

また、高等教育機関は、学生の履修課程のみならず、サークル等の課外活動、教員の研究や社会でのさまざまな活動、行事を通じての交流活動など、社会貢献の多くの手段がある機関です。大学・短大は、県内外、また国内国外を問わず、多くの人材が行き来する場でなくてはなりません。「Think Globally, Act Locally」という言葉が使われるようになって久しいですが、これはまさに、地方の高等教育機関において実践しなくてはならないことと考えます。今後さらに内外の交流が活性化する事業を推進し、学生はもちろんのこと教職員にも広い視野を身につけるための機会を設け、世界規模で鹿児島を考えられるような人材を育成してまいります。

個性と社会性の両立ができる人材の育成を目指して

志學館高等部・中等部は、30年に満たない歴史でありながらも、地域社会の皆様からは高い評価をいただき、また卒業生も各方面で活躍しています。若い学校であるからこそ、教職員、生徒、また保護者の皆様も含めて、学校に関わった一人ひとりが情熱を注がれた結果にほかなりません。志學館が高い評価を得られておりますのも、その自由な校風の中にあつて、生徒自身が責任感を持ち、「自立」だけでなく「自律」できる人間性が育成されているからこそと考えます。個性を伸ばすということは、多くの私学で謳われていることでもありますし、本学園でも推進していくところではありますが、他人と協調し、また相互

の意見を尊重していかななくては、活かされるものではありません。個性と社会性が両立してこそ、有為な人材となりうるのです。

これから円熟期を迎える本校においては、これまでの情熱をそのままに、同窓生との絆も確かめ合いながら、たしかな学力、ゆたかな人間性、たくましい行動力という教育理念を堅持し、次の時代を担う若者を育成してまいります。

教育機関における保育のあり方の確立を

鹿児島女子短期大学附属かもめ幼稚園、なでしこ幼稚園、すみれ幼稚園では、遊びや体験を通じた保育を軸に、それぞれの年齢に応じた保育計画に基づき、子どもの自主性、社会性、積極性を育む保育を行ってまいりました。付帯施設であるなでしこ保育園もまた、これに準拠する保育目標を掲げています。今後も園児の個性を伸ばし、一人ひとりの豊かな心や生きる力を育てていくとともに、園児の社会性の育成もまた非常に重要であると考えます。本学園では、園児はもちろんのこと、教員、園児、保護者、教育実習生、地域社会や進学する小学校を含め、全てのステークホルダーの方々とのさらなるコミュニケーションの強化を図り、その根底にある人と人とのふれあいを大切にしたいと思えます。

平成27年度にはいわゆる子ども・子育て3法に基づき、新制度による認定こども園への移行が始まります。いかなる制度の改正が行われようとも、やはり学校法人として、建学の精神に基づく教育は堅持していかななくてはなりません。移行の際は、教育機関である私立学校として、また養成校をもつ学校法人として、どういった体制が最も本学園の理念を具現化するのに最適であるか検証しながら、慎重に選択してまいります。

理念の相互共有を目指す学園へ

本学園は、大学・短期大学・高等学校・中学校・幼稚園、そして保育園を設置する総合学園です。とはいっても、一貫して進学していくわけではなく、それぞれの課程が、それぞれの教育目的と教育内容をもって創設され、発展してきたものです。その特色を活かし、設置校間で相互に補完するような形での連携事業も様々な形で行ってまいりましたが、個々の事業における連携に留まっているのが実情です。それぞれの連携事業を推進していくことももちろんですが、そのためには全体的な方針と理念を共有し、さらには各設置校が相互の教育方針や事業内容を理解していくことが必要です。

また、同じ学校に所属していても、部署が異なるだけでほとんどコミュニケーションがとれていない状況があるのも事実ではないでしょうか。学園全体としては、日常の経営、財務、広報活動等の情報を共有していきながらも、今後は教職員の交流や情報交換の機会を設け、相互理解を深めてまいります。

前理事長志賀壽子先生は、わずか10年の間に、大学院の設置、学部改組、保育所の設

置、人事や組織の改革、校舎の移転といった、学園の転換となる様々な大きな事業を成し遂げられました。これらが実現できたのも、積極的な情報公開を行い、また設置校をつなぐさまざまな会議体を有効に機能させることによって、現場の意思を吸い上げ、問題意識を共有し、学園が一丸となれる組織体制を整えられたからに他ならないと考えます。今後はこの組織体制を継承し、設置校間の距離がより近くなれるような学校運営を行ってまいります。

むすびに

創設者満田ユイ先生の後継者となり、学校法人としては初代の理事長となった志賀フヂ先生は、地域の女子教育の先駆者として、さまざまな講演や寄稿、また随筆を残されています。その中で、いきすぎた平等思想に対する警鐘ともいえる記述が多くみられます。昭和38年の講演においては、今後は良妻賢母を育てるだけの時代ではないとしつつも、女性は女性らしくあり、その特有の性質を以て人類文化に寄与しなければならないと述べられています。女子教育について第一線に立っていたからこそ、ややもすると男女は全て平等であり、何もかも同じようにしようとする社会の風潮をひしひしと感じ取っていたからではないかと推察されます。半世紀たってなお、今でも日本でこの種の問題が絶えないのは、社会システムはそのままに、男女に同じ役割を担わせようとしてしまっているからなのではないでしょうか。我々は、教育という視点から、社会のあり方も常に注視し、時には小さくとも声をあげていく必要があります。全ての人々が生き生きと暮らせるような社会づくりの一端を担うこともまた、私学の使命と考えます。その積み重ねが、新たな価値観の創造につながるのです。

次の世代が幸福になれるような次の時代を創造していくよう、学園一丸となって取り組んでまいります。